OP-257 LITHOSKOP (リソスコブ) を用いた ESWL の治療経験 一尿路変更術後患者を中心に一

北島病院¹⁾, 川口市立医療センター²⁾

北島 清彰¹⁾, 北島 彰子²⁾

【目的】2006年4月より体外衝撃波結石破碎装置 LITHOSKOP を導入して尿路結石に対して治療を行っている。今回は尿路変更術を行い、カテーテルを腎盂内に留置している症例に対する治療経験について発表する。

【対象と方法】尿路変更術を受けカテーテルを留置している症例で腎盂内に結石がある症例を対象とした。抄録作成時には3症例5結石に対して治療を行った。右腎臓が1例、両側尿管皮膚瘻が2例であった。全例腎内に腎盂バルーンカテーテルが留置されていた。男性2例、女性1例、右側が3結石、左側が2結石、年齢は70歳から89歳であった。体位は仰臥位で、治療ポジションはオーバーヘッド、下方左右40度の角度を使い分けた。全症例で麻酔、鎮痛剤は使用していない。

【結果】2回で破碎、排石できたのは1結石だった。他の4結石は複数回の治療を必要とした。その原因としてカテーテルから排石できるまでの大きさに破碎する必要があった。麻痺などがあり長時間の治療に体位を維持できない。認知症があり痛みに対し我慢ができず動くなどの理由があった。しかしストーマの位置をはずしてオートフォーカスで照準を合わせて碎石することができた。

【結論】LITHOSKOP を用いて、尿路変更術後でカテーテルを留置している症例、長時間体位をとれない症例に結石破碎を行い、排石することができた。

OP-258 当院における尿路結石治療法の是非に関する検討

市立秋田総合病院泌尿器科¹⁾, 盛岡友愛病院泌尿器科²⁾

石田 俊哉¹⁾, 成田 直史¹⁾, 上田 勉¹⁾, 富樫 寿文¹⁾,
松尾 重樹¹⁾, 佐々木 秀平¹⁾, 鈴木 明²⁾

【目的】尿路結石の治療法は、その位置や大きさなど様々な要因によって選択されている。その選択が妥当であったかどうか当院における症例を retrospective に検討してみた。それにより判断の基準を導くことを目的とした。

【方法】2005年1月から2006年8月までの間に当院で尿路結石の治療を行った全症例を検討した。

【成績】ESWLにより治療を行ったのは、171名(のべ409回)であった(腎盂・腎杯結石:65名, 腎盂尿管結石:18名, 上部尿管結石:72名, 下部尿管結石:15名)。TULは62名, PNLは1名に対して施行した。そのなかには初期治療の反応が悪く、複数の治療法を行ったものも少なかった。

【結論】尿路結石症の治療法は、ガイドラインも作成されているように、ほぼ確立されてきつつある。しかし初期治療で成功しない場合も少なくはない反面、機器の進歩により治療の範囲は拡大してきている。ガイドラインにとらわれることなく、患者の希望を聞きながら最善の治療を注意深く検討することが重要と思われる。

OP-259 新型軟性腎盂尿管鏡 UR-P5 と URF-P3 を用いた上部尿路内視鏡手術成績の比較

岐阜県総合医療センター泌尿器科¹⁾, 杏林大学泌尿器科²⁾, 浜松医科大学泌尿器科³⁾, 長崎大学大学院泌尿器科学⁴⁾, 富山県立中央病院泌尿器科⁵⁾

高橋 義人¹⁾, 横井 繁明¹⁾, 奴田原 紀久雄²⁾, 東原 英二²⁾,
麦谷 壮一³⁾, 野俣 浩一郎⁴⁾, 松尾 良一⁴⁾, 瀬戸 親⁵⁾

【目的】オリンパスメディカルシステムズ社が新規開発した URF-P5 は、up 側湾曲角度 180°、down 側湾曲角度 275° を有する新型軟性腎盂尿管鏡である。本機器を URF-P3 と比較検討したので報告する。【方法】2004年7月より2006年6月末までに全国7施設において URF-P5 と URF-P3 を使用し、上部尿路結石の治療を各々37例と39例に施行、上部尿路腫瘍、腎出血の診断治療を各々9例と16例に施行し、それぞれの結果について比較した。【結果】治療後3ヶ月目の上部尿路結石治療効果は、P5では評価対象症例24例中全例、100%で結石消失を認めたが、P3では32例中27例、84%で結石消失を認めたにすぎなかった(P=0.042)。下腎杯結石での結石消失率はP5で4例中4例、100%、P3で4例中1例、25%(P=0.064)であった。また上部尿路腫瘍、腎出血の診断治療はP5、P3ともに全例で目的を達成した。【結論】URF-P5はその湾曲角度の大きさを生かして、下腎杯結石を含めた上部尿路結石治療や、上部尿路腫瘍の診断治療に有用であり、その有用性はURF-P3と同等かそれ以上であると考えられた。

OP-260 Laparoscopic Ureterolithotomy

徳島大学医学部泌尿器科¹⁾, Department of Urology, Assiut University, Assiut, Egypt²⁾

Mohamed Gad El-Moula¹⁾, Fathy El-Anany²⁾,
Abd El-Moneim El-Haggagy²⁾, 金山 博臣¹⁾, 井崎 博文¹⁾,
高橋 正幸¹⁾, 福森 知治¹⁾, 西谷 真明¹⁾

Objectives : We retrospectively evaluated our results, safety and efficacy of laparoscopic treatment of ureteral stones. Patients and Methods : 74 patients with ureteral stones underwent laparoscopic ureterolithotomy. The mean age was 39.4. The stones were in the right side in 44 cases and 30 in the left. The mean stone size was 1.8 cm. The procedure was retroperitoneal in 66 cases and transperitoneal in 8. Flexible ureterorenoscopic extraction of stone kidney through the laparoscope was performed in one case as adjuvant procedure. The ureter was stented and not sutured in 64 cases. Results : The procedure completed successfully in 96% with open conversion was performed for 3 patients. The mean operative time was 58.7 minutes. There were no major complications. The mean hospital stay was 6.4 days. One patient developed ureteral stricture during follow up managed endoscopically. Conclusion : laparoscopic Ureterolithotomy is a safe and effective line of treatment for ureteral stones either primary for large impacted stones or as a salvage procedure for failed ESWL or ureteroscopy.